

台湾高校生との英語プレゼンテーション制作を通じた協同学習

奈良県立法隆寺国際高等学校 氏名 山本 英樹

本紙において、台湾の生徒と本校英語部の生徒が協働学習にて制作する英語プレゼンテーションの取り組みについて紹介する。プレゼンテーション制作の過程においてはICT技術を駆使し、オンラインでのSkypeによる同期性（リアルタイム）でのやり取りに加え、e-mailやLINEによる非同期性（リアルタイムでない）でのやり取りにて英語プレゼンテーションの制作をオンライン上で行った。今夏8月にはWorld Youth Meeting（以下WYM）というプログラムにて発表するために台湾生徒が来日し、以後オフラインによる制作活動、発表リハーサルを行い、発表する機会があった。結果、この制作活動を通じて、英語部の生徒達はアカデミックなレベルで、プロジェクトに関する英語によるコミュニケーションの機会があった。また、同一チームとして取り組むことで「協同学習」を体験し、ICTを積極的に有効活用する場面が見受けられた。

1. 背景

「協働学習」一般的ではあるが、本研究では英語教育の観点から、「協同学習」という表現を用いたい。ジョンソン（2012, p.224）によれば、

協働学習：ともに力を合わせて協働作業を行う状態
ないし実態を指すものである

協同学習：お互いに協力して学び合うとともに、その意義に気づき、他者と協力する技能を磨き価値観を内在化することを意図する教育活動

という定義をしている。更に、「協同学習」には五つの基本的構成要素から成り立っている。構成要素とは、

1. 互恵的な協力関係(Positive Interdependence)
2. 個人の責任(Individual Accountability)
3. グループの改善手続き(Group Processing)
4. 社会的スキル(Social Skill)
5. 対面しての相互作用(Face to Face interaction)

である。今回の取り組みにおいて、英語プレゼンテーションを完成させるには、台湾と日本の高校生の間でこれらの基本的構成要素は不可欠であり、「協同学習」が成立している様であった。この様な「協同学習」の取り組みは多様なスキルが求められる昨今、必要とさ

れている活動であると捉えている。

OECDのデセコプロジェクトによれば、国際的に共通の鍵となるキー・コンピテンシーが確立され、開発されている。その3つのコンピテンシーとは、相互作用的に道具を用いる力、自律的に活動する力、社会的に異質な集団で交流する力である（立田 2014）。これらのコンピテンシーを踏まえ、具体的に現場でどのような方法でこういった力を養う実践を行っていくことが必要となる。

またグリフィン他（2014）による21世紀型スキルでは、4つの分類と10のスキルの獲得が提唱されている。それらは、

思考の方法

1. 創造性とイノベーション
2. 批判的思考、問題解決、意思決定
3. 学びの学習、メタ認知

働く方法

4. コミュニケーション
5. コラボレーション（チームワーク）

働くためのツール

6. 情報リテラシー
(ソース、証拠、バイアスに関する研究を含む)
7. ICTリテラシー

世界の中で生きる

8. 地域とグローバルのよい市民であること
(シチズンシップ)
9. 人生とキャリア発達
10. 個人の責任と社会的責任
(異文化理解と異文化適応能力を含む)

であり、多様なスキルが今後求められる。更には、知識基盤型社会から様々な知識を組み合わせ問題解決することが求められる社会となり、自ら能動的に学習するアクティブラーニングが求められている（小林&成田 2015）。この様な状況下で実践的な取り組み例として台湾と日本人生徒による英語プレゼンテーション制作の協同学習を紹介する。

2. 実践・活動の流れ・方法

本研究ではWYMという国際交流プログラムに参加した。WYMとは主にアジアの国々が学校とパート

ナーになり、合同で英語プレゼンテーションを制作し、発表する姉妹プログラムの事で、本校では台湾の学校がパートナー校となった。具体的な手順は、

1. プレゼンテーションのテーマ発表
2. パートナー校決定
3. Facebook や Skype 等でプレゼンテーションの構成を議論
4. パートナー校生徒訪問（5日程度）
5. 訪問期間中に舞台合同リハーサル練習
6. 日本福祉大学にて各学校が集結し、発表

であった。この過程では生徒が中心となって自主的にプロジェクトを計画し、構想を練り、お互いに交渉し合っ

てプレゼンテーションの制作を行う様子が垣間見られた。パートナーとなる学校が台湾の学校に決まると、教員同士の電子メールでの打合せを行った。後に Facebook や LINE による非同期（リアルタイムでない）の生徒同士の交流を始めた。テーマが”Building Bridges over the Sea of Diversity”に決まると、そのテーマに基づき、自分達のサブテーマを決めて、具体的内容構成の議論が始まった。そして、アイデアが固まり、議論の機会が必要となれば Skype にてリアルタイムでの意見交換を行った。本校の生徒からの提案はフェアトレードによるもので、台湾生徒は海外とのカルチャーショックがテーマであった。この二つのテーマを一つのプレゼンテーション案を交渉し、お互い納得いく内容にしていくのが至難の業であるが、最終的には上手く話し合っ

てまとまっ

1. 情報収集：ブラウザ（Safari など）
2. 辞書機能：英語辞書（英辞郎 など）
3. コミュニケーション：SNS（Line、Skype、Facebook など）
4. 画像編集：写真加工（Line、Sonic Pics、Photoshop など）
5. 発表：プレゼンテーション（Microsoft PowerPoint、ロイロノート）

た。目的に応じて、上記のソフトやアプリを活用していた。殊にスマートフォンのアプリに関しては教員が教えると言うよりも寧ろ生徒達が自分使い勝手の良いもので画像や動画を編集する場面が見られた。

台湾生徒が来日した後、本校にてオフラインによる交流が行われた。リハーサル等、初めて合同で練習を行った。また、同期性（リアルタイム）の環境下、英語で意見の交換や提案が行われた。練習のみならず、ホームステイや観光等を通じて、生徒間の結束を深める機会があった。最終的には場所を会場の日本福祉大学へ移し、他の高校生や大学生の前でプレゼンテーション発表をするという取り組みを行った。

3. 考察

自律学習、メタ認知能力、協同学習、ICTスキルの向上、また英語コミュニケーション能力の向上等、多面的に有効であったと考える。授業ではないため、生徒が自主的に取り組み、生徒主体で段取りを進めていった。合同で作業を進める中で、台湾と日本の生徒同士が互恵的な協力関係を築いていた様子だった。またICTの活用においてはオンラインによるFacebookやSkype等のSNSの使用に加え、パワーポイントによるスライド作成の為、写真加工や動画編集をipad上で行う等、多様に活用する機会があった。殊に生徒達が使い慣れたスマートフォンのアプリをipadにダウンロードして使うことで生徒達は自分達で出来る幅が

広がった様感じた。そして、オンラインとオフラインによるコミュニケーションを目的とした実践的な英語の使用頻度はとても高く、英語コミュニケーション上での方略やスキルを向上させる機会となった。更に言えば、このプログラムを通じて、Cummins (1980)の定義による、日常会話や道案内などの会話力となる Basic Interpersonal Communication Skill (BICS)と、アカデミックなレベルでの表現力である、Cognitive Academic Language Proficiency (CALP)の両面における語学習得の機会があったと考えられる。この様に、多様なスキルを身に着ける機会があったと捉えられる。

4. 課題と今後の取り組み

課題として、持続発展的な観点からプロジェクトを通じて多様なスキルを向上させる良い機会ではあるが、単一プロジェクトとして、発表が終われば終わりではなく、生徒同士が断続的にコミュニケーションをとる仕掛けづくりが今後の課題となっていく。

加えて、課外活動のクラブ活動としてではなく、本課の授業としてどの様にカリキュラムに組み込んで、どの様に展開するかが課題となる。また英語科としての授業の中でこの様なプロジェクトを展開することで、必要とされる多様なスキルをどの様な手法で涵養させるかということも今後の課題となる。

5. 参考文献

- 唐澤 博・米田謙三 (2014). 英語デジタル教材作成・活用ガイド』大修館書店.
- 小林昭文&成田秀夫 (2015). 『今日から始めるアクティブラーニング：高校授業における導入・実践・協同の引き』学事出版
- ジョンソン, D. W. ジョンソン, D. W. ホルベック, E. J. 石田裕久 梅原巳代子 (訳) (2012). 『改訂新版 学習の輪：学び合いの協同教育入門』二瓶社出版.
- 立田慶裕 (2014). 『キー・コンピテンシーの実践：学び続ける教師のために』明石書房 P 39.

Cummins, J. (1980). The Entry and Exit Fallacy in Bilingual Education. *NABE Journal*. Vol. 4, pp. 25-60.